

MINAMI KYUSYU NO JOKAKU

南九州の城郭

第2号 #
南九州城郭談話会報 #
平成8(1996)年5月30日発行 #
#####

佐土原城跡

本丸部確認調査概要報告

木村 明史

佐土原城跡は宮崎県宮崎市佐土原町大字上田島に所在する県指定の山城である。

今回は城跡の保存整備にむけての事前発掘調査であるが、そのねらいは本丸部の使用期間及び使用形態と三層櫓（天守閣）の存在を確認することにある。

三層櫓については、従来から文献や絵図には三層櫓が描かれていたが、当時島津は天守閣を設けないというのが通説であった。しかし、調査の結果、四方2段組10m×12m平方の石垣が出土し、3箇所礎石も確認することができた。さらに付近には河原石の遺構、軒丸・軒平瓦、鯨瓦（織豊期）等も検出され

た。このことから文献上では天守閣と呼ばれている建物遺構がほぼまちがいなく存在していたことが立証された。さらに本丸部周囲には上堀状遺構の可能性も伺われた。豊臣秀吉は1587（天正15）年に佐土原を島津家久に安堵した。従って瓦の特徴を検討してみるとこの期から1590年代までの間に三層櫓は造られたと推測でき、このことは豊臣が島津本家に対する抑止力を島津家の中で唯一三層櫓の築造を佐土原島津に命じて働かせていたと推察できる。今後は出土遺物・遺構を検討することによって、使用期間や建物構造の全体像を把握していきたい。



佐土原城跡…空中写真（南側から撮影）



佐土原城跡…石垣（南側から撮影）

●見学会同行記

前回の見学会は、始良町の重富にある岩剣城跡と帖佐の建昌城跡で行われた。当日は生憎の雨模様となったが、約70余名の精鋭たちは春雨をものともせず、老いも若きも悪戦苦闘しながら本丸を目指した。

1. 岩剣城跡

麓の岩剣神社を過ぎて林道を約400m程登ると、城跡への登り口(標柱)が見えてくる。ここで、車を止め、後は足場の悪い沢に沿って進んだ。途中、道が崩れた箇所ではロープを頼りにガケを登り、急斜面では、竹にしがみつきながら登る。お陰で頂上に着いた頃は、膝はガクガク、皆フーフー言っていたが、霧雨にけぶる眼下の眺望に、疲れもふき飛んでしまった。

実際に城跡に佇むと、文献から知り得るおぼろげな岩剣城の輪郭が、次第にはっきりとした像になり、より一層身近な存在にも感じられた。

2. 建昌城跡

支城として防御性の高い岩剣城とは対照的に、建昌城は本城候補にも取り沙汰されただけあって、一つの曲輪規模が広く、方形に近いものが多かった。樹木と雨のため視界がきかず、ちょっと、残念だったが、土塁に囲まれた北東の中心部は、周囲に階段状に曲輪がめぐり、中世城郭の雰囲気をよくとどめているようである。将来、山城公園の計画もあるそうで、今から楽しみだ。

●例会報告

午後からの例会は、始良町中央公民館で開催された。まず、大学康弘氏による宮崎県高原城跡についての発表がなされた。この城は、伊東四十八城の一つと数えられる南九州特有の台地立地型城郭。天正4(1576)年島津義久



が迫ったとされる軍略上重要な位置を占めていたことを示す城として文献にも残る。南西部に残存する枡形虎口、南東部の登城口、さらに土塁や夥しい帯曲輪、見張台跡の遺構等の残存状況から、島津軍が攻めあぐねたという文献の記述が遺構の上から立証できたのでは、という縄張図による調査成果が報告された。

次いで、下鶴弘氏による建昌城の発表があった。この城は歴史的に二つの画期があるという。瓜生野城と呼ばれた豊州家島津氏の居城時代と近世初頭の島津家久による島津氏の本城候補地にあげられた時期である。(本城候補についての経緯は、発表後に五味顧問より概略の説明がなされた。)

現在の建昌城には、土塁で方形に囲った曲輪群が2ヶ所残っており、上記の二つの画期のそれぞれの中心部と考えられている。また、現在の城跡は、発掘調査の結果から、近世初頭の普請工事によるもので、工事途中で、未完成に終わった姿を止めていると考えられている。

発表後に、次のような感想助言があった。

- ・建昌城の曲輪の配置は並列的であり、権力の質を反映したもので、家臣団の構成にも関係があろう(柳原敏昭氏)。
- ・縄張は、整然とした都市計画的な区画であり、島津家久が薩摩の政治の中心として、防御性と政庁の役割を兼ねた位置付けをしていたと考えられる(服部英雄氏)。

(上田 耕, 下鶴 弘)

高鍋城跡の発掘調査について

吉本 正典

高鍋城跡は、宮崎県児湯郡高鍋町大字上江に所在する、中世から近世にかけての城郭である。古くは、財部と呼ばれ、伊東氏、土持氏、島津氏が攻争を重ねた要地である。天正15(1587)年、筑前より財部および櫛間に転封となった秋月種實は櫛間に居城したが、種實の嫡男種長が櫛間より移った。次代の種信の時に高鍋城と改称し、以後秋月藩の居城となった。

その高鍋城の北東部（現在は竹林、杉林となっている）で平成7年度に緊急急傾斜地崩壊対策事業が計画され、平成8年2月1日から3月25日までの間、宮崎県教育委員会による緊急調査が実施された。

調査地内には、大きくは上下二段の腰曲輪様の平坦面が見られた。それぞれ「上段区」「下段区」と称することにした。

「上段区」「下段区」とともに、表土(褐色土。樹根を多く含む)中より近世の陶磁器、瓦、銭貨などの遺物が出土し、該期の柱穴、柵痕と推測されるPitが検出された。

また、「上段区」においては、近世面の下位に中世の造作と見られる溝や土塁状の遺構、石積み列などが認められ、確実には二期にわたる「古高鍋城」の一部が確認できた。土塁状の遺構には、断面観察の結果、炭化物を多く含む間層が見られた。石積み列はかなり崩れているが、状態の良いところでは2～3段に積んでいたことがわかる。それらの遺構は土持氏、伊東氏、島津氏時代の遺構と推測される。また、多くの土師器(かわらけ)も出土しており、その年代比定も遺構の時期比定のため重要となってくる。

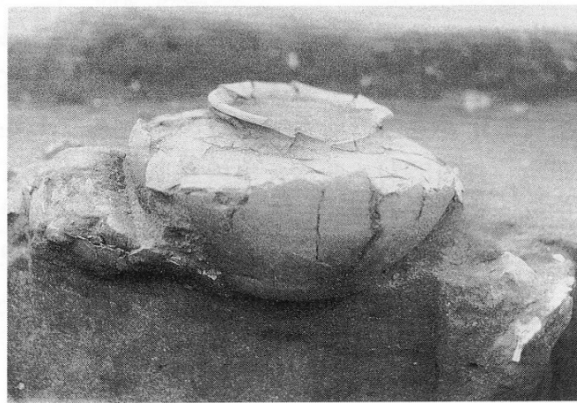
※グスク 奄美・沖縄に分布する城としたものを指す。

宇宿貝塚のグスク遺構

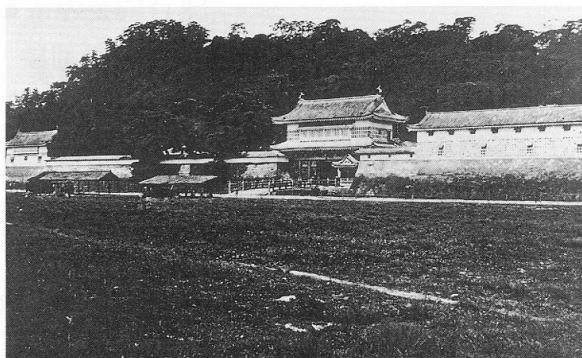
中山 清美

宇宿貝塚は、鹿児島県大島郡笠利町宇宿に所在する。昭和8年に発見され、その後、九学会連合の調査や笠利町教育委員会による発掘調査が行われ、昭和61年に国指定になる。これまで、宇宿貝塚は縄文時代、弥生時代相当期の貝塚として知られていたが、昭和53年の発掘調査で比較的新しい溝状遺構がトレンチ断面で確認された。その後、整備のための発掘調査が平成5年から始まり、グスク時代の遺物包含層が確認された。包含層は青磁・白磁・類須恵器等の他に滑石製品、滑石混入土器、布目圧痕文土器なども出土している。遺構としては、V字溝が深さ約1m、幅約1.2mをなす。それに類須恵器と小児人骨が一緒に出土している。人骨はその他に焼骨が壺に納められた状態で出土しており、南島で初めての火葬人骨の例が発見されている。

これまで、グスク時代に伴うこれらの調査は行われておらず、今後グスクを調査する資料の一つになると思われる。貝塚全体は小丘をなしており、全体が聖域的な要素も含んでいる。その他にV字溝は万屋グスクでも同様に発見されており、堀切を持つグスク以外に新たなグスクの機能も考えなければならないと思う。



類須恵器と小児人骨



鶴丸城本丸

尚古集成館に8葉の鶴丸城古写真がある。今回より、これらの写真を順次紹介していきたい。

まず最初は、現在の県庁付近から鶴丸城の本丸部分を写したものである。白壁の部分がちょうど現在の黎明館の敷地部分にあたり、右側から御兵具所、御楼門^{ごろうもん}、そして少しおいて御隅^{すみ}(角)櫓^{やぐら}となる。御隅櫓の左手、白壁の左端部分は、本丸と二之丸の間にあった堀を埋めた部分で、ここから左が二之丸。現在の県立図書館の敷地となる。

熊本城や姫路城など天守閣を持つ城郭と比べると、鶴丸城は敷地も狭く、貧弱な感は免れない。しかし、シラス台地を城として利用することが多かった南九州では、石垣を持つ城は希で、立派な石垣・御楼門を持つ鶴丸城は、島津氏の権威を誇示するのに十分な城であった。

なお、この写真の撮影時期は、従来、漠然と明治初年といわれていたが、昨年、霞会館史料展示委員会の松平乗昌^{のりまさ}氏の調査によって、明治5年(1872)、明治天皇の鹿児島行幸の際、撮影されたことが明らかになった。

(松尾 千歳)

鶴丸城

鹿児島城山の麓に構築された屋形造りの近世薩摩藩主島津氏の居城

尚古集成館

江戸時代末期に建設された反射炉などの工場群。機械工場は国指定の建造物

岡本城跡

鶴嶋 俊彦

岡本城跡は、熊本県球磨郡岡原村字麓・城谷に所在し、建武5(1338)年の『相良定頼申状案』(相良家文書82号)に「構城郭於郡内」として須恵・永里・奥野とともに岡本の名が見えるのを初見とする。また、永和3(1377)年の『一揆契状神水案文』(衾寝文書2 501号)には「岡本越前守頼季」の城主の名が見える。天文21(1552)年には岡許地頭相良相模守頼春が生害され、その後は稲富左近太夫長蔵が在城し、弘治3(1557)年の上村三兄弟の謀反で人吉勢の攻撃を受け落城した。天正8(1580)年には頼春の嫡子で芦北朴河内城の城番であった東駿河守頼兼が城主となった。下って、寛永3(1626)年には相良家の重臣であった相良清兵衛がその麓を隠居所となし城下町を建設したが、寛永17(1640)年に「清兵衛隠居仕由二而、我等之居城より三里へだち、足かかりかしこき所を見立、去寅之年屋しきかまへを仕、町屋をも取立、拙者城下之うとくなる町人共隠居所へめし寄せ、城下悉くすいび仕候、剰久々城下二罷在候商売人を、法度之由申付、清兵衛隠居所へ皆々呼取申候事、付百姓之家共こふち取、家こふち申候事、」(『相良頼寛目安状案』相良家文書938)と主君相良頼寛から幕府へ訴えられた。この折、人吉城の絵図2葉とともに岡本城絵図2葉と清兵衛の岡本屋敷絵図1葉が作成され、現在に伝わる(『相良清兵衛屋敷其他絵図面』熊本県立図書館所蔵)。

岡本の城下の場所は、球磨川左岸に形成された広大な複合扇状地の扇頂部分にあり、城跡はその背後の断層崖末端にある。平地との比高70mの標高278.3mの頂部付近が主郭で、ここより派生する長短4本の尾根を堀切で断ち切る防御をとるが、いずれの尾根の堀切も土塁を伴う数条の堀切であったり、巨大な二

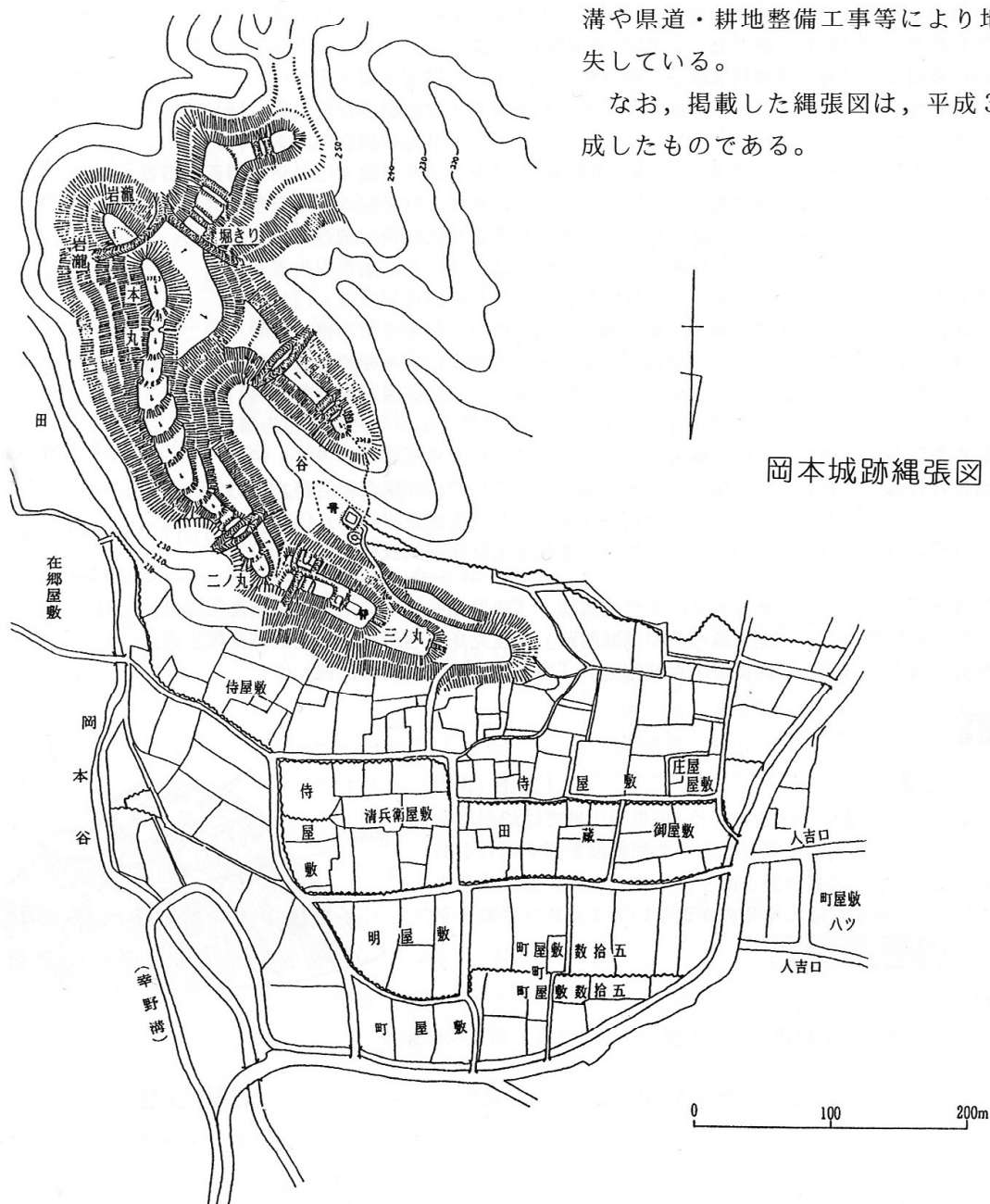
重堀切をもつなど極めて丁寧な普請がなされ、遺構の残りも良好である。北側の麓集落へ延びる尾根に主要な曲輪群が形成され、主郭と大堀切との間には削平不十分な小さな曲輪が10段程連続する。下方の諏訪神社の背後には、土塁を伴う堀切と空堀・竪堀が複雑に組み合わせてあり、先の大堀切との間の尾根の鞍部にも数段の曲輪がある。諏訪神社から西方には十分な削平の曲輪が4段連続する。

以上の3箇所の曲輪群が絵図にみえる本丸

・二ノ丸・三ノ丸に相当するが、城本体の構造は古い様相を残しており、清兵衛が岡本城に大きな改造を加えたとは考えられない。

城下町については、地割りが良く残っており、絵図との対比は困難ではない。東西46間・南北50間の清兵衛屋敷は、麓集落の中央に明瞭に地割りを残し、その西方の侍屋敷4軒・庄屋屋敷も良く残る。これらの北側に形成された町屋群は、町屋そのものが短期間の存続であったことと間口が小さな地割りであったため、町筋が小道や溝として残る程度である。町屋西端部は宝永2(1705)年完成の幸野溝や県道・耕地整備工事等により地割りを消失している。

なお、掲載した縄張図は、平成3年度に作成したものである。



城郭関係発掘調査報告書一覧(鹿児島編)

(新東晃一)

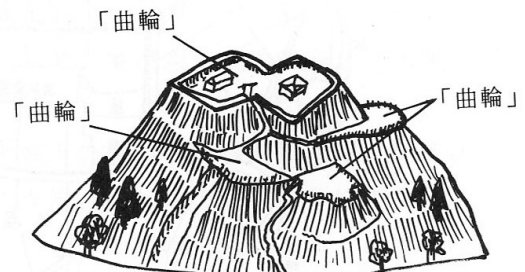
- ・加世田市教育委員会 1977 「村原(杵ノ原)遺跡」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・加世田市教育委員会 1980 「上ノ城」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
 - ・鹿児島県教育委員会 1981 「中尾田遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(15)
 - ・鹿児島県教育委員会 1981 「加栗山遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)
 - ・大口市教育委員会 1982 「平泉城跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・鹿児島県教育委員会 1983 「鹿児島(鶴丸)城本丸跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(26)
 - ・鹿児島県教育委員会 1983 「苦辛城」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(27)
 - ・鹿児島市教育委員会 1984 「鹿児島(鶴丸)城二之丸跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)
 - ・河口貞徳・本田道輝 1984 「廻城」『鹿児島考古』18号
 - ・川辺町教育委員会 1984 「平山城」『川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・国分市教育委員会 1985 「城山山頂遺跡」『国分市埋蔵文化財発掘調査報告書』(2)
 - ・横川町教育委員会 1987 「横川城跡」『横川町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・伊集院町教育委員会 1988 「一字治城跡」『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・鹿児島県教育委員会 1989 「下伊倉城・下伊倉遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(50)
 - ・伊集院町教育委員会 1990 「一字治城跡」『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
 - ・鹿児島県教育委員会 1991 「鹿児島二之丸跡(遺構編)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(55)
 - ・始良町教育委員会 1991 「建昌城跡」『始良町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
 - ・伊集院町教育委員会 1991 「一字治城跡」『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)
 - ・鹿児島市教育委員会 1992 「谷山弓場城」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
 - ・鹿児島県教育委員会 1992 「鹿児島二之丸跡(遺物編)」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(60)
 - ・蒲生町教育委員会 1992 「蒲生城二之丸跡」『蒲生町埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
 - ・志布志町教育委員会 1992 「志布志新城跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』(14)
 - ・伊集院町教育委員会 1992 「一字治城跡」『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書』(6)
 - ・知覧町教育委員会 1992 「知覧城」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(3)
 - ・鹿児島市教育委員会 1993 「清水城」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(16)
 - ・鹿児島市教育委員会 1993 「谷山菊地城跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(17)
 - ・金峰町教育委員会 1993 「牟礼ヶ城跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
 - ・伊集院町教育委員会 1993 「一字治城跡(6)」『伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)
 - ・知覧町教育委員会 1993 「南別府城跡」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(4)
 - ・鹿児島市教育委員会 1994 「川上城跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(18)
 - ・知覧町教育委員会 1995 「知覧城」『知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書』(5)
 - ・加世田市教育委員会 1995 「別府城」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』(10)
-
- ・鹿児島県教育委員会 1987 「鹿児島県の中世城館跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(43)
 - ・鹿児島市教育委員会 1989 「鹿児島市の中世城館跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(6)
 - ・始良町教育委員会 1994 「始良町中世城館跡」『始良町文化財調査報告書』(1)

キーワード

●郭(くるわ)

(上田 耕)

「曲輪」とも書く。城の一区画をいう。中世の山城では傾斜地を削平して造りだす。削平の手間をはぶいて傾斜面を残す場合もあるが、大部分は、地形の高い面を削り、その土を低い面に盛り上げ水平にする。周囲から侵入するのが難しい加工された平地・平場を「郭」と総称する。



【参考文献】

- 村田修三 1981 「城郭用語辞典」『日本城郭大系別巻Ⅱ』新人物往来社
- 村田修三 1989 「山城とは何か」『朝日百科 日本の歴史5 中世Ⅱ』朝日新聞社

お知らせ

第4回の見学会・例会は9月下旬
熊本県人吉市で開催の予定

日向における文献資料と城郭

米澤 英昭

城郭において、発掘調査はその機能年代等を把握するのに効果的な手段であるが、文献資料もまた城郭に関する様々な情報を提供してくれる。

まず、城郭の呼称については、史料中に表記されているものがほとんどである。例えば、「上井覚兼日記」⁽¹⁾には天正4(1576)年の島津氏の伊東攻めの記事があるが、そこには高原・飯野・三ノ山・田野・都城といった城名が見え、また、飯野・三ノ山には内城があったことまでが表記されている。その他、「北郷忠相同忠親代日帳寫」⁽²⁾の天文12(1543)年に北郷氏が志和池城を攻めた時の記事には、「柳河原口」・「はね田口」・「今拵」・「西拵」・「寸池」といったものが見られ、志和池城の構造を垣間見ることができる。また、同史料の天文三(1534)年2月26日の記事には、「(前略)加治山・勝岡、同日城祝、山内豊前守地鎮候、」とあり、北郷(都城島津)忠相が城を手に入れた時、家臣に命じて地鎮を行っていることが分かる。これに関しては、梶山城・勝岡城とほぼ同時期に存在した都之城跡(主郭部)の発掘調査で、地鎮に使用されたと思われる輪宝墨書土器が出土しており⁽³⁾、当時実際に地鎮が行われていたことを裏付ける証拠となった。

文献史料では、この他に古絵図もある。佐土原城や都之城等で詳細な絵図が残っており、特に佐土原城では発掘調査の成果と絵図によって天主台の存在が確認されつつある。

このように、文献資料は、あらかじめ史料批判が必要ではあるが、発掘調査の成果とともに、城郭を知るのに非常に有効な手段である。

- (1)岩波書店 1954「上井覚兼日記」『大日本古記録』
 (2)重永卓爾編 1989『都城島津家史料3』都城市図書館
 (3)都城市教育委員会 1991「都之城跡(主郭部)」『都城市文化財調査報告書第13集』

平成8年度の日本城郭史学会は、4月21日江戸東京博物館(東京都墨田区横綱1-4-1)で総会と大会を開催した。総会では、次のような報告がなされた。

(1)江東区で中川船番所跡、南会津で九々布城跡の発掘、(2)近江・京都・姫路・名護屋で秀吉関連の城郭調査、(3)会員松本諒士氏の『築城』刊行、(4)セミナーと見学会を月1回の割で開催した、などである。

大会では、「豊臣政権の城郭」のテーマで西ヶ谷恭弘氏の報告と会員によるパネルディスカッションがあり、①秀吉の居城の三期区分、②現地調査による京都のお土居の遺構、③名護屋の陣屋跡遺構と港湾遺構・名護屋城の破城遺構、④史料からみた信長・秀吉の二条城、⑤妙見寺の空堀と天守、⑥秀頼の京の城、⑦秀吉の安土城等に関する調査成果が報告された。

150人を越える参加者、ビデオによる近世城郭紹介、城郭イラストを描く会員の存在、活発な質疑などが印象的であった。(三木 靖)

全国中世城郭研究者セミナー開催

期 日 平成8年8月3・4・5日
 場 所 東京都八王子市中央大学
 連絡先 中世城郭研究会 TEL03-3462-5171

事務局便り

募 集 !

◎機関誌『南九州城郭研究』創刊号の原稿募集

1. 論文 400字×50枚程度(図版・註を含む)
 2. 研究ノート 400字×20枚程度(図版・註を含む)
 3. 史料紹介 400字×5~20枚

幹 事 会 報 告

- 第1回 1月13日(土) 於: 鹿児島短期大学
 *会員・入金・公文発送状況について
 *会報のスタイルについて
 *幹事の役割分担について
- 第2回 2月24日(土) 於: 鹿児島短期大学
 *入金・入会状況について
 *第2回見学会・例会の日程と役割分担
 *第3回例会, 発表者等について
- 第3回 4月27日(土) 於: シルクイン鹿児島
 *入金・入会状況について
 *第3回見学会・例会の準備等
 *会報『南九州の城郭』第2号の編集
- 第4回 5月17日(金) 於: 鹿児島短期大学
 *入金・入会状況について
 *第3回見学会・例会の役割分担等
 *会報『南九州の城郭』第2号の編集

【新入会員】

(5月25日現在)

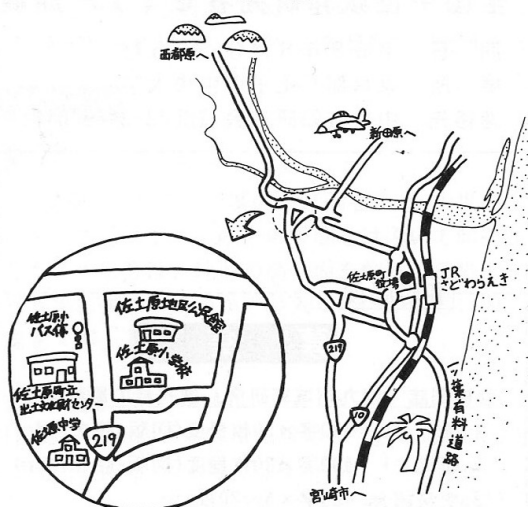
有馬 壽夫	石橋 新次	大久保浩二
岸田 幸市	木島 孝之	北原 梓
桐野 作人	久保 紘一	久留主長利
桑波田武志	黒田 裕司	小溝萬寿雄
坂之上和子	阪元 鶴雄	関 一之
武末 純一	田原 龍夫	月野 功
出合 宏光	當間 嗣一	富田 逸郎
富原 道晴	堂込 秀人	中井 均
中村 宗幸	長留 忠生	中山 清美
永山 修一	新田 耕一	橋口 勝嗣
浜添 弘光	林 匡	馬場 正子
東 憲章	福元 一道	福元 忠一
福元美恵子	藤井 法博	藤宮 千浩
堀之内一成	本田 昇	松崎 則男
松永 明敏	右田 幸雄	山崎 克之
山下 稔	八巻 孝夫	吉田 浩之
吉村 和高	吉本 正典	

次回見学会・例会案内

- 日 時 平成8年6月9日(日)
- 集合場所 宮崎県佐土原城跡歴史資料館前
- 交通案内 ・日豊本線佐土原駅から西都市
 行きバス東春田下車徒歩8分
 ・宮崎市から西都市行きバス佐
 土原小前下車徒歩5分

- 会 順 (1) 見 学 会
 10:00 集 合
 10:30 佐土原城跡発掘現場見学
 12:00 昼食(佐土原地区公民館)
 ※希望者は弁当を受付けます。

- (2) 例 会
 13:00 研究発表・質疑応答
 15:00 解 散



◎研究会のお知らせ

第4回織豊期城郭研究集会の開催

期 日: 平成8年9月1日(日)

場 所: 佐賀県立名護屋城博物館

テーマ: 徹底討論ー石垣ー

見学会: 肥前名護屋城跡, 陣跡

【連絡先】織豊期城郭研究会 TEL0538-58-0433

第2号をお届けします。会の活動も, 3回目を数える宮崎県佐土原町での見学会・例会で, やっと軌道に乗りました。本号には, 幹事会の活動状況を掲載いたしました。今後も, この会を活発にしていきたいと思います。幹事一同思っておりますが, 会員の皆様方のご協力なしには成り立っていきません。率直なご意見・投稿を宜しくお願いいたします。

次号の会報発行は, 8月中旬の予定で, 原稿の締め切りは, 8月10日です。下記まで。 (Shige)

重久淳一 〒899-51 始良郡隼人町内山田1138-5

南九州の城郭 第2号

発行所 鹿児島県川辺郡知覧町郡17,880
 ミュージアム知覧内 上田耕気付
 南九州城郭談話会
 (振替口座 02040-6-37850)

発行者 三 木 靖
 印刷所 (株)トライ社
 入会金500円 年会費1,000円